

# 令和7年度新潟県立阿賀黎明高等学校第1回学校運営協議会 議事録

## 1 日時

令和7年5月19日（月）9時30分～11時30分

## 2 会場

新潟県立阿賀黎明高等学校 多目的ホール

## 3 参加者

委員7名

県教育委員会1名

（オブザーバー参加）

- ・阿賀黎明高校魅力化プロジェクト関係者3名
- ・阿賀黎明探究パートナーズ関係者1名
- ・阿賀黎明高等学校教職員2名

計14名

## 4 次第及び概要

(1) 開会 校長挨拶（斎藤校長）

(2) 会長、副会長選出

遠藤佐委員を会長、猪俣一成委員を副会長に選出

(3) 会長挨拶（遠藤会長）

(4) 阿賀黎明高等学校の状況等

① 令和7年度の課題と取組について（斎藤校長）

- 生徒の様子について
- 令和7年度の生徒数・教職員数について
- 令和7年度の課題と取組について（困っていること→やってみたいこと）
  - ・生徒募集（地元校への説明等の強化）
  - ・阿賀津川中学校との中高連携の推進
  - ・ボート部員の減少
  - ・地域探究活動の一層の推進
  - ・生徒の学力差への対応
  - ・教育相談や特別支援教育への対応

② 教育相談に係る取組と課題について（長谷川教頭）

- 取り組んでいること
  - ・担任による面談
  - ・全教職員による月1回の情報共有会議
  - ・ケース会議（「個別の指導計画」の作成）
  - ・スクールカウンセラーの活用（2名体制）
  - ・寮生情報交換
  - ・授業のユニバーサルデザインの導入
  - ・こころとからだの健康アンケート（RAMP S）
- 課題（今年度目指すこと）
  - ・確実な教育相談体制を維持した上で、生徒の困り感を解消し、可能な限り早急に通常の学校生活に戻ることができるような校内体制、マニュアル等の整備

③ 令和7年度の地域と連携した教育活動予定について（黎明学舎 渡邊講師）

ア 総合的な探究の時間

- 【1年生】・探究サイクルを体感する「ちょこプロ」
  - ・小さなプロジェクトをつくり、地域とつながる「福祉体験」
  - ・地域の継ぎたい想いと出会う「ミッション型職場体験」
- 【2年生】・地域を舞台としたテーマ別プロジェクト活動及び発表会の実施
- 【3年生】・プロジェクト活動をキャリアに紐付ける発表会の実施

イ 学校設定教科「地域学」

- 【2年生】・阿賀町の資源のワークショップ型講座
  - ・中高連携や学校行事での実践を通じた他者との協働活動
- 【3年生】・地域の拠点、事業所を起点とした地域プロジェクト活動

ウ 家庭科

- 【家庭基礎(1年生)】阿賀町の社会保障制度や高齢者福祉に関する課題を知る「福祉体験」
- 【フードデザイン(2年生)】地域の郷土料理や特産物を活かした献立考案、実習
- 【保育基礎(3年生)】阿賀町の子どもの福祉について課題解決を体験活動で学ぶ「保育園訪問」

エ その他

- 【中高連携】・地域学Aにおける阿賀津川中学校1年生と連携した授業の実施
  - ・2年生の総合的な探究の時間における阿賀津川中学校2年生と連携した授業の実施
- 【阿賀黎明探究パートナーズ】体育祭や黎明祭等での「阿賀黎明おもっしえぞマルシェ」への協力
- 【探究学習に関する職員研修】スクール・ミッション、スクール・ポリシーの実現に向け、地域の方々と教職員が共に理解を深め、認識を共有する研修の実施

④ 令和7年度地域みらい留学生募集活動について（西田コーディネーター）

- まなび体験会（現地開催） 4回実施
- オンライン高校留学フェス 3回実施
- 東京対面説明会 1回実施
- テーマ別合同オンライン説明会 2回実施
- オンライン高校別説明会 5回実施
- オープンスクール 9～10月に随時実施

⑤ 質疑応答・意見交換

- （齋藤委員・質疑）志願者の増加に向けて、地元中学校への働きかけで、効果的なコンテンツはあるか。  
→（齋藤校長）阿賀町内中学校の保護者を対象とする説明会を開催したいと考えている。なんとなく阿賀町から町外に出たいという中学生を阿賀黎明高校に振り向かせる方策を考えたい。  
（西田コーディネーター）阿賀町内の中学生全員に、阿賀黎明高校のパンフレットを配付する予定である。パンフレットには、阿賀津川中学校を卒業した先輩の活躍の様子を掲載している。
- （齋藤委員・質疑）地域みらい留学に定員はあるか。希望者が多いときに、定員以上に留学を認めることはできるのか。  
→（遠藤会長）寮の収容人数は28人である。地域みらい留学の生徒の選考にあたっては、面接を実施し、寮生活をしっかりと送ることができそうかどうかを見ている。寮の収容人数を考えると、現在の受け入れ体制では、定員以上に留学を認めることはできない。
- （猪俣副会長・意見）この協議会で、学校の課題を共有して、どうしていくかを考えていかなければならないと考える。今後は、もう少し突き詰めて分析していく必要がある。例えば、令和7年度の入学者は、阿賀津川中学校からは減ったが、三川中学校からは増えた。このことはなぜなのかということ进行分析することで、方策が見えてくるかもしれない。
- （猪俣副会長・質疑）ボート部の部員が減少し、存続が危ぶまれるとのこと、また、地域みらい留学の生徒は、地域ボランティアとボート部の活動の両立が難しいとのことであるが、なぜ2つの活動の両立が難しいのか。  
→（齋藤校長）ボート部は、上位大会での活躍を目指して活動しており、土曜や日曜、祝日でも活動を行う日が多い。地域ボランティアも、学校の休業日に活動を行うことが多いため、どうしても日程が重なってしまう。特に、地域みらい留学の生徒は、地域ボランティア等の活動をしたいと思って入学している者が多いため、ボート部への入部をためらう傾向があるのではないかと考えている。  
→（猪俣副会長・意見）ボート部の活動日を限定することも許容するなど、柔軟な対応ができるよう、あり方をみなしていくべきではないか。

- （齋藤委員・質疑）生徒に学力差があるとの話があったが、授業はどのような生徒に合わせるのか。  
→（齋藤校長）授業によって異なるが、全員に合わせることは難しい状況がある。今年度、数学は少人数授業が実施できているが、教職員数の減少によっては、今後、確実に継続できるとは言い切れない。
- （清田委員・意見）阿賀黎明探究パートナーズの協力体制が弱くなっていると感じている。授業において、もっと協力できる部分があると思うので、考えていきたい。
- （清田委員・質疑）小・中学校では阿賀町と連携して主権者教育を進めている。阿賀黎明高校でも、阿賀町と連携した主権者教育を実施してはどうか。  
→（齋藤校長）主権者教育は、本校においても、高等学校のカリキュラムの中で主権者教育に取り組んでいるところではあるが、今後は、阿賀町との連携も考えていきたい。
- （猪俣副会長・質疑）新しい部活動を設けることはできるか。  
→（齋藤校長）昨年度から生徒に、新たにやってみたい部活動等があれば教えてほしい、と投げかけているが反応がない。現状は、新しい部活動を設けることは考えていない。
- （石川委員・意見）中学生のニーズを知るべきである。地元の中学生からアンケートをとったり、中学生対象の全国的な調査を参考にしたりすることが考えられる。
- （猪俣副会長・意見）地域みらい留学の生徒募集活動は成果が出ている。中学生のニーズを知って、地元の中学生の募集活動を強化すべきである。
- （清田委員・意見）5月9日に実施された「探究成果発表会」に参加したが、阿賀黎明高校の探究活動は魅力的であり、生徒には確実に力がついているということが改めてよくわかった。このことをいかに発信していくか、考えていくべきである。
- （国本委員・意見）地元中学校から見ても、阿賀黎明高校は魅力がある。中学校の先生方も入学を勧めているが、なかなか伝わらない。阿賀津川中学校は、今年度の3年生が「あがプロ」を始めた学年であり、阿賀黎明高校との関係性がこれまでより深い。生徒へのPRとともに、保護者にどのように魅力を正しく伝えるかが大切である。
- （猪俣副会長・意見）少子化が進む今、地方の小規模校は同じ悩みを抱えているはずである。一人一人に寄り添う環境があり、生徒は悩みを抱えていても、3年間でこんなに成長するのだという様子を知ってもらえる工夫ができればよい。
- （齋藤委員・意見）地元中学校からの志願者増加に向けての方策を、もっと掘り下げて議論していくことが重要ではないか。

**※ 委員の総意により、(6) 熟議では、事前に用意していたテーマを変えて、地元中学校からの志願者増加に向けての方策を議論することとなった。**

(5) 指導・助言（齋藤指導主事）

- 中学生の高校選択の理由となる「なんとなく〇〇」という固定概念や思い込みを打破するような、具体的なデータを提示する必要がある。例えば、大学入試の多様化に対応していることやきめ細かな指導、探究学習の成果、生徒の成長をデータにして、地元の方々に見せるなどが考えられる。参考までに、県教育委員会が実施した、県立高等学校の将来構想に係るアンケートでは、高等学校に求めることとして、「探究的な学びができること」が上位であった。
- まずは、魅力化を引き続きしっかり進めてほしい。
- 本日の協議会の白熱した議論は、学校運営協議会の理想である。雰囲気大切に議論を進め、できることから具現化していつてもらいたい。

(6) 熟議

**（変更した）テーマ「地元中学校からの志願者増加に向けての方策」**

- （西田コーディネーター）地元の中学生在阿賀町以外の高校に行きたいという願望は、ただの憧れか。それとも、阿賀町以外の高校に行かないと自分が望むようなことができないという勘違いか。後者であれば、阿賀黎明高校の魅力をもっと発信して、この学校でもできるということに気付かせることができそうである。
- （猪俣副会長）志願者の確保は、全国の地方の小規模校にとって共通の課題だと思う。地方の高校の活路はどのようなところにあるか。  
→（齋藤指導主事）一人の教員が同じ時間に、学力差のある一人一人に合わせて授業を展開することは難しい。学びを複線化し、個々の生徒に寄り添った対応ができることが小規模校の活路ではないだろうか。
- （齋藤委員）3年間でこんなことができるということや、出口（卒業後のイメージ）を具体的に伝えることが大切である。
- （清田委員）現在の阿賀黎明高校の生徒の姿を地元の方々に伝えることが大切である。
- （猪俣副会長）小規模校だからできることを発信すべきである。現在の阿賀黎明高校の取組は、旧津川高校のイメージから変わってきていることを積極的に伝えるべきである。
- （阿賀黎明探究パートナーズ 高橋理事）出口（卒業）の数値目標を明確に設定するとよいのではないか。卒業生の満足度や探究学習を実績要件とした大学の合格者数、難関大学進学者数などが考えられる。
- （齋藤委員）数値で示すことは、企業経営においても肝である。大学入試の総合型選抜に対応していることを極端に伝えるとよいのではないか。また、生徒数が少ないことをメリットとして、教員が寄り添っていること（例えば、教員一人あたりの生徒数）をデータ化するとよい。

- （清田委員）阿賀町では、ここ最近も小・中学校の統廃合があり、その都度、住民が統廃合前の学校に魅力があったと嘆く姿が見られた。地元住民は小規模校の魅力がわかっているはずである。阿賀黎明高校が現在置かれている状況は、統廃合前の小・中学校と同じであると伝えると、住民に感覚をわかってもらえるのではないか。
- （阿賀町教育委員会学校教育課 大江課長）寮の収容人数を考えると、10人以上を地元で確保したい。今後は、「広報あが」の「黎明日誌」で地元出身の生徒の様子を掲載することを考えている。また、黎明学舎内で中学生にPRしていくことも考えている。

(7) 閉会の挨拶（猪俣副会長）